



学生による 先輩 インタビュー

Tadashi Kozuka

小塚 忠氏

元 JUKI株式会社
常務取締役

PROFILE

愛知県一宮市出身。昭和24年、岐阜大学工学部の前身「岐阜工業専門学校」に入学。卒業後、『技術武者修行』にて8社もの企業を転々とし、新製品の開発を手がけた。最後に入社したJUKI(株)では工業用ミシンを世界一に育て、その開発過程はNHK「プロジェクトX」で放送された。

OB

決してごまかさず、日々新しい知識を吸収し、
多くの人が強く求めている技術を成し遂げることが、
技術者という人間として必要なこと。

**終戦を迎え
広島を見た私は、
技術力の差を痛感しました。**

山本: 技術者をめざそうとした理由やきっかけは何でしたか?

小塚: 私は海軍兵学校で敗戦を迎えました。人生の目標を失い帰郷する途中、原爆で焼け野原と化した『死の街』広島を見て、精神力では解決できない技術力の差を痛感しました。原爆の原理が知りたくて入門書を読みあさり、原子物理学を研究したいと思いました。

自宅は戦災で全焼、贅沢は言えません。まず、自宅に近い岐阜工業専門学校(後の岐阜大学工学部)に入学しました。当時の校舎・設備は大変粗末なものでしたが、若手の先生方は大変前向きで、精力的な講義・研究を行っていましたね。人間性にあふれた教授陣でした。また、学生であっても大学昇格運動をするなど、自由な校風でもあったと記憶しています。

**一流の技術を身につける
ために『技術武者修行』を
進めてきたのです。**

山本: 卒業後、8社もの企業を転々とされましたが、何かに満足できないような状況があったのでしょうか?

小塚: 最近、フリーターと呼ばれる若者がいます。仕事を見つけにくい時代になってきているからでしょう。身勝手にいい加減であるという見方もあるかもしれませんが、本人は大変辛い思いをしているのだらうと思います。

私は戦後ゼロから出発したわけですが、当時は生きていくことが辛い時代でした。社会の不正を正したいと、卒業後数年間は政治活動に没頭しましたが、事実無根の中傷によって組織から排除されました。失意で自殺を考え、自室に閉じこもっていた時に、母から「死んではいけません。生きるために働き、その中で生き方を見つけることです」と言われ、頭の中だけで考えていた自分を反省しました。

私は全力を傾けて働ける職場とし

て、圧延工という重労働を選びました。高温の中で毎日鼻血を出し、倒れそうになるまで働きました。不満を口にしても、誰も相手にしてくれません。夢中で頑張ると、人並みに仕事ができるようになって初めて仲間に認められることができました。理屈よりも一人前に仕事をするのが、人生の第一歩だと知りました。

重労働をしながら、機械設計関係の勉強を毎日2時間以上しました。身近な課題を改善する設計にトライし、自分の技術者としての能力を自覚し、機械工場の設計部門に転職しました。

先輩の知識は何でも学ぼうと質問を繰り返して、自分で再計算してより良い案を提案しましたが、かえってうさがられました。1ヵ月もしないうちに「面倒を見切れない。すべて任せるから、商品完成まで全責任を持って」と言われてしまいました。困ったと思うと同時に「しめた」と思いました。

計算と実験を繰り返し、いくつかの新製品の開発に成功しました。しか

し、「我流の技術だけでは世界に通じないのでは?」という不安がつきまわっていました。そこで、一流の技術を身に付けるために、他の企業で経験を積むという道を選んだのです。

その間、給料の2~3割を専門書に注ぎ込み、毎日2時間以上は勉強をしました。そして、習得した知識・技術を後輩に伝え、育てた段階で次に進むという『技術武者修行』を進めてきたのです。

**技術者の姿勢として重要なのは
お客様に役立っていることです。**

山本: そして、8社目の企業としてJUKIに入社され、とどまられたわけですね。そこにはどんな魅力があったのでしょうか?工業用の自動糸きりミシンの開発についてはNHKの『プロジェクトX』で放送されましたように、ご苦労も多々あったと思いますが…。

小塚: 技術者の姿勢として、お客様や他の人を傷つけるような技術ではダメだということが基本です。

自分が満足することより、世の中のためになり、お客様に役立っていることが重要です。工業用ミシンのユーザーの意見や苦情を聞いて、世界中で未完成だった「自動糸きりミシン」をどれだけ多くの人が強く求めているかを知りました。行き詰まっていた糸きりミシンの開発を会社が私に任せてくれたので、失敗したら辞職する覚悟で引き受けました。

山本: お客様が何を求め、どうしたら喜ぶかを常に考えるということでしょうか?

小塚: 実は私の母は、岐阜師範学校(後の岐阜大学教育学部)を卒業した教師でしたが、まわりの人に大変

慕われていました。それは立派な人というわけではなく、人のためになることを自分を犠牲にしてでも行える人だったということです。

岐阜大学が現在でも地域に密着し、親しまれる大学であるように、社会の役に立っているかどうかを基準に考えることでしよう。

山本: 私も、機械工学を選んだのは、自分で物をつくることに興味を持ったからなので、その物がお客様に喜んでもらえる体験をしたいと思っています。就職して技術者となった時に、いつも気にかけておくことや必要な能力について、どのようにお考えでしょうか?

小塚: 第一に事実をありのままに認識することです。次に現状を正しく解析し、原理を踏まえて解決策を少なくとも3案以上考え、テスト確認をして検証することです。

決してごまかしたりしてはいけません。同時に、自分の知識が陳腐化しないよう日々新たな知識を吸収していくことが大切です。

山本: 仕事として技術者を選んだ場合、家族にある程度の犠牲を強いると思いますが、そんな中でも一番うれしかったことは何ですか?

小塚: お客様に感謝された時は家族も喜んでくれました。また、会社で怒鳴られたこともあります。一方では期待されているからうれしかったこともあります。社内の仲間や他部門の人たちに感謝された時もうれしかったですね。

山本: 経営者となった時には、技術者の時と比べて意識は変わりましたか?

小塚: 経営者は利益を生まなければダメです。会社の製品やサービスがお客様のためになっていなければ需

要はなくなります。お客様がいなくなればその会社は存続できません。単に利益を追求するだけではなく、お客様から求められる会社をつくりあげることが経営者の仕事です。

**ごまかさず事実を認め、
学ぶ姿勢があれば
良いと思います。**

山本: 最後に、今の学生に伝えたいこと、またはアドバイスをいただけますか?

小塚: とにかく、目の前の問題に全力でぶつかってほしいですね。ごまかさず事実を認め、学ぶ姿勢があれば良いと思います。時にはごまかしたと思うことがあるかもしれませんが、退却したら際限なく後戻りしてしまいます。そうすると絶対取り戻せません。

私が若い時は、生意気だと思われたかもしれませんが、とにかくがむしゃらにやりました。失敗してやり直し、そうして認められていったと思います。みなさんにもそんな時期があっても良いのではないのでしょうか。

山本: わかりました。本日は貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。

今回の在学生訪問者



Shuhei Yamamoto
山本 宗平
大学院工学研究科
機械システム
工学専攻 1年
(現在2年)

Visitor

余談・・・

今回のインタビューは、平成20年11月3日に開催した「工学部テクノフェア」で小塚氏の特別講演が行われた機会に実施しました。なお小塚氏は、本学の工学部同窓会「岐阜大学工業倶楽部」の関東支部長を務めていらっしゃいます。

●岐阜大学工業倶楽部関東支部ホームページ ▶▶▶ <http://gifu-t-kanto.com>